

日本語母語話者が訓練すべき英語の音素 - 発音訓練が聴解分野にもたらす効果 -

A Benefit of Pronunciation Training: How Orally Practicing Unfamiliar Phonemes Can Positively Affect Aural Identification of These Phonemes

内田 浩樹

UCHIDA Hiroki

和文要旨：World Englishesの観点で言えば、いわゆる日本人英語も一つの英語として存在してよいと言える。一方で、国際コミュニケーションのルールとして英語を見た場合には、World Englishesにも共通の要素が必要であろう。英語の発音がその一つに挙げられるが、母語が異なれば、音声の体系も異なり、非英語母語話者は、母語の転移を様々に受けている。このことがコミュニケーションに致命的な障害になっていると考えられる。本論では、日本人母語話者が訓練すべき英語の音素を特定していく手順を示すとともに、発音訓練がもたらす聴解能力の向上の可能性を指摘する。最後に、特定した音素に関して実際に訓練した学生の進歩について報告するとともに、今後開発すべき発音教材の方向性を提案する。

【キーワード】 World Englishes、言語転移、発音、国際コミュニケーション

Abstract : In terms of World Englishes, Japanese-like English may stand as one valid variety of English. When considering English, on the other hand, which can be used as a tool for international communication, the various Englishes found around the world should have a lot in common. Among the necessary similarities is pronunciation of English words: sound systems are different in different languages, and non-native speakers of English speak with a lot of transfer from their mother tongues, which may cause fatal breakdown in communications. In this paper I make an attempt to show the steps in identifying phonemes of English for which Japanese students must train themselves in order to enable themselves to participate in the World Englishes community. My suggestion is that practicing phonemes which are not present in Japanese may help learners with their pronunciation, but that this pronunciation practice will also improve learners' ability to identify these phonemes while they are listening to English. I report the results from actual trainings with extracted phonemes, and show the improvements the students made after a series of training sessions. Finally, I suggest steps that could be further taken in this area of research.

【Keywords】 World Englishes, language transfer, pronunciation, international communication

1. はじめに

英米以外にも英語のネイティブ・スピーカー（以下、英語母語話者と表記）は存在する。国の規模で言えば、

インド、南アフリカ、フィリピンなどが好例である。こういった国々では、公用語が複数存在しており、複数の言語を母語として習得している場合も少なくない。この

最小对立	音素	正解率
pet / bet	/p/ /b/	92%
bat / pat	/b/ /p/	100%

語	正解率
violin	60%
trip	32%
drive	37%
table	67%
with	56%
work	44%

語	カタカナ表記
violin	バイオリン・バイオ

英語の立率	口本語からの代替立 (例)
-------	---------------

--	--

→ 1111	→ 1111	→ 1111
--------	--------	--------

結果を示したのが表15である。発音訓練後に語尾の子音を聞き取る能力が向上したことがわかる²³⁾。単語の綴り、意味を共に記憶しているにも関わらず、聞き取ることができないのは、コミュニケーションという視点では、大きな問題と言える。発音訓練により、日本語では語尾に位置しない子音の聴解能力が高まることは、英語学習上大きなメリットと言えるだろう。

7. まとめと展望

日本語の発音の転移を受けた英語発音が、あらゆる場面で国際コミュニケーションの障害になるわけではない。日本語からの代替音で英語の音の多くをまかなうことができる。一方で、日本語に存在しない英語の音素のうち、最小対立をなすものについては、適切に訓練をし、発音することができるように指導することが肝要である。日本語母語話者が英語を学習する上で訓練する必要のある音素を抽出し、これらの音の発音を訓練することによって聴解能力が向上することが確認できたことは、さらなる発音訓練に示唆を与えるものであろう。

国際コミュニケーション・ツールとしての英語では、母語の如何を問わず、母語の転移を効果的に利用し、母語からの代替音でまかなうことのできない音素を適切に抽出して訓練することが重要であろう。非英語母語話者の英語教育において、このような視点が共有されれば、World Englishesの意図する多様性は、よりいっそう評価されていくものと考えられる。

本論では、もっぱら単語レベルでの聴解に重点を置いた。実際の口頭コミュニケーションでは、子音で終わる単語の後に母音で始まる語が位置した場合には、単語の境界線を越えて音の連結が生じる。日本語では、こうした音の連結は英語ほどには顕著に生じないため、日本語母語話者が困難を感じる側面であろう。また、about itのような連鎖では、単語をまたいだ音の連結が起きると同時に、aboutの /t/ に弾音化が見られる。単語レベルでの発音訓練では、これらの聴解能力の育成に十分な効果を発揮するとは明言できない。

発音と聴解の訓練要素は、一つ一つの音にとどまらないことにも注目したい。適切にストレスを置いて発音すること、また、イントネーションや、シラブルを中心としたリズムの取り方も重要な要素である。日本語では、語のストレスは英語のように顕著に表出しないため、学習者は、しばしば日本語におけるピッチ（音の高低）をストレスと混同している。また、ストレスをはっきりと置いて語を発音する習慣がないことから、英語においても適切にストレスを置くことができない傾向が強く見ら

れる。また、語のストレスはさほど重要ではないという先入観が学習者の中に観察される。これも日本語の音声体系の一つの転移として捉えることができるだろう。

語のレベルの発音に習熟したレベルから、フレーズの発音訓練に進み、イントネーションやリズムも含めた訓練方法と教材の開発が必要であると考えられる。

聴解訓練というと、中学校・高等学校においてもほとんどの場合が、意味内容の理解を中心に指導され、テストされている²⁴⁾。これは、英検、TOEICのような英語運用能力検定試験や、高等学校・大学入学選抜試験における聴解力テストで、内容把握の出題がされていることに起因すると推測される。学習者を取り巻くこういった環境を鑑みれば、英語指導者がwritten materialsによって文法、語彙、内容把握の訓練をおこない、その成果は聴解力テストにおいて発揮され得ると判断することは批判できない。しかしながら、聞くことによる内容把握の段階に到達するためには、語のレベルにおける聴解訓練をする必要があることを指摘したい。

近年は、電子辞書の普及により、多くの学習者が初期の段階から電子辞書を使用することが多くなってきた。複数の英語辞典が図版を含めて収録され、一度の入力で同一の語を複数の辞書で検索することが可能になったり、フレーズや、文の一部を入力し、慣用表現やしばしば引用される格言などを適切に検索したりする機能の充実は、目を見張るほどである。また、単語にとどまらず例文に至るまで英語母語話者の発音で再生することができる機能は、発音を習得する上で大きな助けとなる可能性を示唆するものである。

2005年度に大学入試センター試験がリスニングテストを正式導入したことにより、聴解に対する興味が高校生の間で高まったことは、英語教育においては歓迎すべきであろう。しかし、音声教材に関心が高まったことにより、紙の辞書に代えて電子辞書を副教材に指定する高等学校が出現したことには、いくらかの懸念を感じる。

単語が英語母語話者の発音で再生される機能は、単語の実際の発音を習得する過程を助けるものとして効果が期待される。一方で、音声地図が形成されにくい年齢に達した中学生・高校生が、英語母語話者の発音する単語を聞くことによって単語の音声の獲得に直結するとは必ずしも言えない。第2言語として英語を学習する際には、音声理解に関して補助的なデバイスが必要であり、その観点から言えば、国際音声記号（以下IPA²⁵⁾と表記）は、音声再生機能を搭載した電子辞書が出現した現在も、その重要性をいささかも失っていない。

英語教育の初期に電子辞書を導入する場合には、英語

n

/dʒ/

/ʒ/

スが多く観察される。

- 15) 2005年～2007年に、大学生188名に単語の聞き取りテストを実施した結果、/æpl/ /æsk/ /ælb1m/ /hæpi/ /kæt/ /bæskit/ /lænd/ をそれぞれ apple, ask, happy, album, cat, basket, landと書き取ったのは、順に58名(30.9%)、65名(34.6%)、60名(31.9%)、138名(73.4%)、146名(77.7%)、112名(59.6%)、106名(56.4%)であった。
- 16) 2005年～2007年に、大学生188名に発音テストを実施した結果、180名(95.7%)が stop を /stɔp/ と発音し、8名(4.3%)が /stɑp/ と発音した。また、crop では、135名(71.8%)が /krɔp/ と発音し、8名(4.3%)が /krɑp/ と発音した。/ɑ/ を発音した8名は同一であった。
- 17) 2005年～2007年に、大学生188名に単語の聞き取りテストを実施した結果、hair, clear, poorを英音(/hɛə/ /klɪə/ /pʊə/)で聞かせた場合、書き取りの正解はそれぞれ、135(71.8%)名、128名(68.1%)、141名(75%)であった。一方、米音(/hɛər/ /klɪər/ /pʊər/)で聞かせた場合は、123名(65.4%)、110名(58.5%)、120名(63.8%)となった。
- 18) 2005年～2007年に、大学生188名に単語の聞き取りテストを実施した結果、till, kill, pull, sale, fill,を聞き取れなかった者は、これらの語をそれぞれ、「ティ・

ティオ」「キー・キオ・キウ」「プ・プー、プウ」「セー・セイ・セウ・セオ」「フィー・フィオ、フィウ」のようにカタカナで記述した。一方、これら5語を聞き取れなかった者でも、still, until, skillは正しく聞きとることができる傾向が見られた。暗い//は、特に短い語について聞き間違いを誘発する要素となっていることがわかる。

- 19) 訓練に使用した語は、合計80語であった。これらの語を、訓練する音素別にまとめたリストを週1回45分×6週間で実施した。
- 20) 正解率(前) = 訓練実施前の正解率、正解率(後) = 訓練実施後の正解率(以降同様に記述)
- 21) 訓練前に実施したテストに用いた語を実験後に再び使用した。
- 22) すべての語のセットに関して、訓練実施前後の正解率の伸びは、有意水準5%で有意である。
- 23) すべての語のセットに関して、訓練実施前後の正解率の伸びは、有意水準5%で有意である。
- 24) 2000年～2007年に、中学校および高等学校にアンケート調査を行った結果の集計。回答のあった学校58校のうち、単語レベルの聴解テストを実施している学校は皆無であった。
- 25) International Phonetic Alphabet

(2008年2月29日受理)